
ドラゴンブライド

サザンクロス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンブライド

【Nコード】

N4555X

【作者名】

サザンクロス

【あらすじ】

貴族が平民を蔑む異世界。貴族のみしか入れないとされている騎士養成学校に、特待生として一人の平民が入学してきた。黒神真紅。人一倍の努力を続け常に上位の成績を誇るが、周囲の貴族からの侮蔑は耐えない。そんな彼だが、夏休みに修行に籠った山で人生の転機を迎える。それは美しい彼女との出会いだった…

コンセプトは「擬人化した美人ドラゴンお姉さまとイチヤイチャする！」

駆け抜ける真紅（前書き）

楽しんでください

駆け抜ける真紅

開け放たれた城門から数百騎もの騎兵が溢れ出した。騎馬はユニコーンやペガサス、普通の馬ではない。中には巨大な狼、獅子に跨っている者さえいる。そして、乗っている者達は須らく十代後半の若者達だ。

「……………」
城壁の上、一人の少年が無言で門から飛び出していく仲間達の姿を見ていた。月、星一つ無い星空のように黒い髪を風に遊ばせながら視線を持ち上げ、凝縮させた炎の如き真紅の目を前に向ける。

「……………来た」

少年がボソリと囁いたその時だ。出撃し、城の前にある草原を駆け抜けていこうとする騎兵達の足並みが乱れ始めた。まるで、目の前から津波を連想させる威圧感を放つ何かが迫ってるかのよう。そして、それは突然現れた。

蒼空を疾走する一筋の紅き流星。草を薙ぐのも、騎兵たちを吹き飛ばしそうになるのもお構い無しに力強く羽ばたく両翼。疾風よりも速く天を駆け抜けるその者の名はドラゴン、レッドドラゴン。レッドドラゴンは城壁の上にいる少年の姿を認めると、歓喜の咆哮を上げ加速した。城壁に正面衝突する直前、レッドドラゴンは翼を一閃させ完全停止、その場で方向転換する。

レッドドラゴンが背を向けたと同時に、少年は城壁から飛び降りた。少しの浮遊感を感じ、レッドドラゴンの背に着地するように跨る。翼が風を切り、レッドドラゴンの巨体を持ち上げる。太陽に向けて急上昇していくのを感じながら少年は大きく両腕を広げる。耳元で風が唸る。だが、恐怖は微塵も無い。何せ、自分が乗っているのは

彼女なのだから。

上昇を止め、漸くレッドドラゴンは前に進み始めた。眼下に広がる草原を走っていく、豆粒くらいの大きさにしか見えない騎兵達を気に留めることもなく、背に乗せた少年と共に蒼空を駆けていった。

駆け抜ける真紅（後書き）

今回は少年とレッドドラゴンの出会いです。

レッドドラゴンの名前どじじい？

自分的には凛々フレイアローズの薔薇なんてのを考えてるんですが…

人生を変える出会い

鬱蒼と木々が茂る山奥の中、一人の少年が身の丈ほどの丈ほどもある細身の長剣を片手で振るっていた。仮想の敵をイメージし、肩に掛かる長さの黒髪を汗で顔に貼り付けながら長剣を操る。イメージした敵の数は十、剣兵が四人、槍兵が四人、弓兵が二人だ。

「……よし！」

深呼吸を一回、頬を叩いて気合を入れて戦闘を始める。四方から一斉に襲い掛かってくる剣兵の一撃が振り下ろされる前に右脚を軸にし回転、剣兵の剣を握る腕を切り飛ばす。間髪いれず逆方向に回って剣兵全員の頭を切る。剣兵の死体を死角にし、二人の槍兵が槍を突き出してくる。少年は跳びあがって二本の槍をかわすが、もう二人の槍が跳んで動けない少年に突き出された。無理に身体を捻り、薄皮一枚で穂先を避け、着地と同時に長剣を一閃させ槍兵を一掃し、返す刀で飛んできた二本の矢を切り裂く。

少年は足下に転がる想像の槍を蹴り上げ、長剣を投げながら、キャッチし投擲する。投げられた長剣と槍は弓兵の胸を貫き絶命させる。

「……駄目だな」

ポツリと一言、少年黒神真紅はそう囁いた。所詮はイメージ、現実でここまで自分に都合よく相手が動いてくれるわけではない。

「実戦が一番なんだけどな。でも、相手になってくれる人はここにはいないし、かと言って片っ端から魔獣と戦うって訳にもいかないしなあ……」

彼の故郷は今いる国、『ドラグニア帝国』から遠く離れた和国という国だ。彼は和国にある『黒神神社』という神社に拾われ、育てられたのだ。孤児である彼は常々、自分を拾ってくれた黒神神社の人たちに何かしらの形で恩返しをしたいと考えていた。そう思ってた彼の目に飛び込んだのは、大国ドラグニアにある騎士養成学校の生徒募集だった。

通常、騎士養成学校に入るためには莫大な金が掛かるので、金を持っていく裕福な貴族くらいしか入れない。だが、特待生で入る事ができたなら、入学金や学費、その他諸々の費用が全て免除される。しかも、騎士養成学校を卒業できれば、王族に仕える事が出来る。つまり、将来は約束されたようなもの。しかも特待生の条件に、優れた者であれば身分は問わないとまである。これは行くしかないだろう、と真紅は単身で和国からドラグニアへと旅立ったのだ。

（まあ、そこまでは良いんだよ。死に物狂いで勉強とか剣の修行したから騎士養成学校にも特待生として入れて……でもなあ）

「まさかあそこまで貴族が陰湿な連中だったとは夢にも思わなかったな」

騎士養成学校に入学して早一年以上が過ぎていた。十六歳になった真紅は、入学当初から変らぬ侮蔑の視線を貴族達から受けていた。たった一人の平民、貴族でないにも拘らず自分たちよりも優秀な成績を収める真紅に、ほとんどの者が嫉妬しているのだ。しかも、一部の教師を除いて教師達は平民である真紅に目をかけてすらいない。

「はあ……ま、いいか。俺は俺でただ頑張っただけだ…ん？」

ふと、真紅はあることに気がついた。山が、森が静か過ぎるのだ。山に入って大体に、三時間もすると、真紅の匂いを嗅ぎつけた魔獣

が襲い掛かってくる。故に真紅は常に場所を移動して修行をしている。だが、今日に限って魔獣の動きがない。それどころか、気配さえもないのだ。

「……………何かあったのか？」

一抹の疑問を胸に抱きながらも真紅は修行場所を変えようと移動を開始する。

「この先にある小川で顔でも洗うか」

誰に言うわけでもなく独り言を呟きながら歩くこと数分、真紅は目的の小川にたどり着いた。が、驚きの余り顔を洗うどころではなくなる。川が血で真っ赤に染まっているのだ。きな臭い鉄の臭いが鼻を突く。

「上流で何があったんだ？ これだけの量の血が流れてくるなんて……………虐殺でも起こったのか？」

或いは、これだけの血を内包するだけの何かがいるのか。真紅は少しだけ逡巡してから、上流に向かって走り始めた。何故かは己でも分からない。上流に何がいるかは分からない。下手をすればその何かに殺されるかもしれない。でも、真紅は向かわずにはいられなかった。

上流に近づくとつれ、川はより赤くなり鉄の臭いはきつくなっている。そして、川の源泉となる洞窟へとたどり着いた。恐る恐る中に足を踏み入れると、吐き気を催すほどの血の臭いが真紅を襲う。

「……………」

思わず生唾を飲み下す。洞窟の奥に何かがいる。確実に何かがある。超越した存在が。恐怖はある、それでも真紅は一步を踏み出した。この先には確かにあるような気がしたのだ。自分の人生全てを帰るような出合いがあると。ごつごつとした岩壁に手をつけながら歩を進めていく。進むにつれ、川のせせらぎ、水滴が落ちる音と一緒に微かな音が聞こえてきた。痛みを堪えるような唸り声のよう。

(近い……)

大人二人分ほどの広さの洞窟を歩きながら、真紅は遭遇の予感を感じた。数秒としない内に狭い通路が終わり、開けた場所に出た。そこで真紅が目にしたのは……。

「……誰ぞ。私の眠りを妨げようとする大馬鹿者は？」

身体を動かす事さえ、言葉を発することさえ苦痛だろう。だが、その生物は自分が弱ってる様子など微塵も見せずに首を持ち上げ、ルビーの如き紅い灼眼で真紅を睨みつけた。攻撃的に後ろへと突き出す二本の角、尻尾には幾何学的な模様が刻まれ、そこから弱々しい光が放たれている。無数の傷に覆われ、水溜りのように広がる血溜まりに横たわりながらもなお美しいと思える巨躯、羽ばたけば数日と掛からずに世界を渡りきる事ができる翼。

「……我を殺しに来たか、『小さき者』よ。殺すが良い、だが私の命は奪えても魂や誇りまでは穢せぬぞ」

世界最強の種族、ドラゴンが彼の目の前にいた。

人生を変える出会い（後書き）

ドラゴンの名前どうしよ？ 何か良さそうなのってありますか？
……あ。アンヘルだけは無しで

お前の名前は何だ？

「ドラゴン……」

目の前の、瀕死であつても自分など虫けらのように殺す事ができる、自分を遥かに超越した存在に恐れることなく真紅はその姿に見入っていた。傷口からは止め処なく血が流れ、その深紅の巨軀を更なる朱に染めている。既に弱りきっていて、羽ばたき一つする力も残っていないだろう。だが、その姿の何と美しいことか。

「どうした、早く殺せ。我を殺せば、富も栄誉も、全てが思いのままぞ」

呆けたように口を開く真紅にレッドドラゴンは殺すよう促す。その美しさに見惚れていた真紅はレッドドラゴンの声で現実に引き戻された。

「え、いや殺せって。俺はそんな心算、微塵も……ってか、速く傷を塞がないと！」

背負っている長剣を鞘ごと投げ捨て、真紅はレッドドラゴンの傷を治そうと近寄る。が、数歩と歩かぬうちにレッドドラゴンの威嚇で足が動かなくなった。

「殺す心算がない……ただの迷い込んだだけか。ならば疾く失せよ『小さき者』。貴様如きに看取られるほど、我の最期は安くはない……どの道、傷が治る前に体力がなくなつて死ぬのが待ち受けるだけよ」

最後の部分はほとんど囁くように言いながら、レッドドラゴンは持ち上げていた首を下ろして静かに目を閉じる。これ以上、人間と交わす言葉などないという意味表示か。顎に指を当てながら、真紅は何度もレッドドラゴンの言った事を咀嚼、反芻する。そして、一つはつきりと頷いた。

「分かった。体力さえ回復すれば、お前は死なないで済むんだな」
言うなり、真紅は地面に落とした長剣を拾い、洞窟の外へと駆けていった。薄目を開け、小さくなっていく真紅の後ろ姿を見送りつつ、レッドドラゴンは思いつ。

「あの『小さき者』、何をやる心算だ？ まあ、我には関係のないことよ……最後にもう一度だけ、あの空を存分に翔けてみたかった……」

生まれてきてから一度として口にしたことのない弱音を漏らし、レッドドラゴンは自分を死へと誘うであろう眠りの中へと落ちていった。

血だ、それも、自分の身体から流れ落ちる以外の血の臭いだ。濃厚な血の臭いが鼻腔を刺激し、レッドドラゴンは薄っすらと目を開いた。視界に飛び込んできたのは先ほど見た、傷だらけで血塗れになった『小さき者』、『小さき者』に担がれた数メートルもある猪の魔獣、ボアだった。既に絶命しているようだ。

「……『小さき者』よ、何しに戻ってきた」

「体力が回復すれば傷が治るんだろ？ だったら何か食べないと」

肩からボアを下ろしながら真紅はレッドドラゴンの問いに答える。このボアはレッドドラゴンに食べさせるために狩ってきたらしい。レッドドラゴンは真紅、ボアの順に視線を向ける。不意に、喉の奥でくぐもった笑い声を上げ始めた。

「我も堕ちたな。このような『小さき者』に温情をかけられるほどに弱く見えていたとは……情けなど要らぬ、失せよ！！！」

魂を揺さ振るような、命を燃やして放たれたレッドドラゴンの怒声。空気が震え、壁や天井に細かな罅が幾つも刻まれた。怒声の大きさに、含まれた憤怒に物理的にも精神的にも圧され、真紅は後ずさるが、決して逃げ出そうとはしない。

「別に、情けなんかかけてない。俺はただ、自分の我俣でここにこっぴやう立っているんだ」

「……何？」

「俺はただ、お前みたいな美しい生き物に、こんな穴倉の奥で死んで欲しくないだけだ！」

「ほづ……」

絶対強者から与えられる威圧感に震えながらも、真紅は目を逸らすことなく言い放った。真紅の言に興味を持ったのか、レッドドラゴンは瞳の奥で業火のように燃やしていた怒りを少しだけ収め、興味深そうな目で真紅を見つめる。

「それに、お前こそこんな所で死んでいいのかよ？ 誇り高きドラゴン。天空の覇者、爆炎の申し子が、こんな土臭い穴倉なんかで最期を迎えていいのか？ もう一度空を飛びたくないのか？」

「……ふん、小僧が生意気言いおって」

忌々しげに呟きながらレッドドラゴンは顔を背ける。視線のみを真紅に向け、ボアを顎で示す。

「こつちまで持ってこい。我にはそこまで身体を動かす気力も体力も残っておらなんだ」

「ん、分かった」

どつこらしょつと、苦勞して真紅またボアを担ぎ、レッドドラゴンが食べ易い場所まで運んだ。レッドドラゴンは口を大きく開き、ズラリと並んだ牙で普通の鎧なんかよりも堅固なボアの毛皮ごと肉を噛み裂き呑みこむ。ボアの巨体があつという間に減っていくのを、真紅はバカみたいに口を開きながら見ていた。

「……貴様は我が恐ろしくないのか？」

ポアを食べ終えると、唐突にレッドドラゴンが問いかけてきた。ほえ？ と疑問の視線を向ける真紅に、レッドドラゴンは少しばかりばつが悪そうに顔を逸らす。

「いや、少し不思議に思ってたな。今まで出会ってきた『小さき者』達は我を見ると、大抵悲鳴を上げるか、罵声を浴びせてくるかのどちらかだったのではな」

そう、レッドドラゴンにとって、真紅のような人間と出会ったのは初めてのことなのだ。彼女が『小さき者』と呼ぶ人間は、大抵の者が見た瞬間に悲鳴を上げる、若しくは敵と見做し罵声を浴びせながら攻撃してくる。投げかけられる視線は恐怖と敵意、浴びせられる言葉は悲鳴と罵声。今まで全く気にする事なかったレッドドラゴンにとっての常識が、『小さき者』達に抱いていた偏見が真紅という人間との出会で根底から覆されようとしている。

「いや、別に恐ろしいなんて思ってたないぞ。寧ろ、何で皆、お前みたいな美しい生き物を恐れるかが俺には分からない」

「（ま、また美しい……）敵意は覚えなかったのか？」

「何で覚えなきやいけないんだ？」

そう問われると、もの凄く返答に困る。気まずそうに視線を逸らすレッドドラゴンを不思議に思いながら、真紅は彼女に背を向けた。

「また明日も来る。じゃあなー！」

「う、うむ。また明日……我がこんな言葉を、それも『小さき者』相手に言う日が来ようとのわの」

小さくなっていく真紅の後ろ姿を見送りながらレッドドラゴンは感慨深そうに呟く。こうして、真紅とレッドドラゴンの奇妙な生活が始まった。

「『小さき者』よ。貴様の目的は何なのだ？」

「いや、だからそんなの無いってば。それに俺の名前は『小さき者』なんかじゃなくて黒神真紅だってば」

真紅とレッドドラゴンの奇妙な生活が始まって三日が経過していた。レッドドラゴンはほとんど全快し、傷だらけだった身体にも、今や傷一つ無い。傷が治った事で口も軽くなってきたのか、レッドドラゴンは頻繁に真紅にある質問をするようになった。目的は何なのだ

？と。曰く、

「貴様ら『小さき者』達は打算無くして誰かを助けようとはせぬ。何か見返りを求めるからこそ、他者を助けるのだろう」

とのこと。それに対し、真紅は無いと言い続ける。

「遠慮せずとも良いわ。貴様も我に何か見返りを求めるために助けたのだろう？ 我等龍族は貴様ら『小さき者』と違って恩を仇で返すような真似はせぬ。安心して望みを言うがよい」

と言われても、本当に打算無しで助けたのだから返答の仕様がな。困ったように頭を掻く真紅。少し考えてから、何か思いついたのか指を鳴らす。

「あ、それじゃ一つだけお願いがあるんだけど」

「……やはりあったか。ほれ、言うてみい。所望するのは我の鱗か、皮か、角か、それとも血か？ 何れも売れば、一生金には困らぬぞ」

そんなことを言いながらも、レッドドラゴンはどこかで落胆していた。この三日間、毎日のように何が目的だと訊ねていたが、この『小さき者』には打算などないのではないかと、本当にただ自分を助けたかっただけなのではないかと思っていたのだ。落胆を表情に出そうとしないレッドドラゴンに、真紅は目を輝かせながら頼みごとというのをした。

「一度だけでいいから、お前が飛んでる姿を見せてくれないか!？」

両の拳を握り締め、目を星のように輝かせながら真紅はレッドドラ

ゴンを見る。対し、レッドドラゴンは表情にこそ出していないが、心中を驚愕で埋め尽くしていた。

「そ、それだけで良いのか？」

ブンブン！ と首もげんじやね？ と心配になってしまいうくらいの勢いで真紅は頷く。不意に、レッドドラゴンの体が揺れ始めた。治ったばかりの傷が痛むのかと、表情を一変させて真紅は心配するがそうじゃなかった。

「ハッハッハッハ！！ 面白い、面白いな『小さき者』よ！」

気持ち良さそうに大笑いしてただけだった。一頻り笑うと、レッドドラゴンは強靱な後ろ足で立ち上がり、翼を広げる。

「良かるう。我が翼が天を羽ばたくその光景、しかとその目に見せてやるっぞ」

「本当か！？」

「我は嘘は言わぬ」

歯を剥き出しにして見せるドラゴン流の笑いを見せ、レッドドラゴンは数日振りに外に出ることにした。ふと、真紅はあることに気がつく。

「なあ、そう言えばお前ってどうやってここに入ってきたんだ？」

「何だ、今更？」

「いや、だってどう考えてもお前の巨体でここまで来れるとは思えないんだけど」

洞窟の入り口辺りや最奥にある広い空間ならとかく、そこに至るまでの狭い通路を、巨体を持つレッドドラゴンが通れるとは思えない。真紅の問いに、レッドドラゴンは笑いながら答えを示した。

「ふん。実際に見せたほうが早いな……こつやったのよ」

次の瞬間、レッドドラゴンの巨躯が燃え上がった。思わず後ろに跳び退り、真紅は襲い掛かってくる熱気から顔を守るため、両腕を十字に組む。数秒もすると、熱風が収まってきた。恐る恐る腕を解くと、そこにレッドドラゴンの姿は無く、代わりに……。

「我のような高度な知性を持つドラゴンはこのようにして、魔法で身体を作り変えて人間になる事ができる。まあ、滅多なことでは変身せんがの……って、どうした『小さき者』よ？」

レッドドラゴンは不思議そうに、鼻血を噴水よろしく噴き出している真紅の顔を覗き込んだ。首を傾げること数秒、自分がどんな姿をしているのかを思い出す。スラリと伸びた肢体に雪のように白い肌、相反するかのような炎髪灼眼。重力に負けることなく揺れる巨大な双山。

「女子の裸を見ただけで、こんな致死量の鼻血を噴き出して気絶したのか……初心な奴よの」

クスクス笑いながら、レッドドラゴンは魔力で紅のドレスを創り、それを着て真紅が起きるのを待った。

更に時は数日ほど過ぎる。相変わらず、レッドドラゴンは真紅のことを『小さき者』と呼ぶ日々が続いていた。今日も今日とで、修行の休憩時間に真紅は空を縦横無尽に飛び回るレッドドラゴンの姿を、子供のように目をキラキラさせながら見ている。どうやら頼みごとというのは本当にそれだけらしく、真紅はそれ以上レッドドラゴンに何も要求しなかった。

おお、と飽きもせずレッドドラゴンの飛翔する姿に見惚れていると、レッドドラゴンがいきなり急降下してきた。反射的に真紅は背負っている長剣を鞘ごと地面に突き刺す。次の瞬間、嵐のような風圧が真紅を襲った。吹き飛ばされそうになるのを、足と長剣を支えに耐える。

「……ぶっ飛ぶかと思った。いきなり何しやがんだ!？」

「いや、すまん。何というかこう、悪戯心が湧いてきて」

怒る真紅にレッドドラゴンは特に悪びれる様子もなく笑ってみせる。

「しかし、よくまあ飽きもせずに私の飛ぶ姿を眺めておるな」

「だって飽きないし。お前が飛んでる姿って、何か心が奮えるんだよな」

レッドドラゴンが飛ぶのを見ている時、心の内側に起こる何ともいえない心地の良い感覚を説明しようとする真紅。レッドドラゴンは面白いものを見るような目で見ていた。

「……」『小さき者』よ。お前は我が飛ぶ姿を見るだけで満足なのか？

「へ？」

真紅がレッドドラゴンの言葉に首を傾げていると、彼女は翼を広げながら振り返る。

「乗るが良い、真紅」

最初、真紅はレッドドラゴンが言った事を理解できなかった。先ず最初に名前と呼ばれたことを理解し、言われた事の意味を判断する。真紅は迷うことなく彼女の背中に飛び乗った。同時に翼が空を切り、二人を持ち上げた。

「いやあ、ドラゴンが他の生物を見下す理由が分かった気がするな……だって、あんなにちっぽけなんだから」

初の飛行を終えた真紅の感想はそれだった。眼下に広がる森。目の前には抜けるように蒼い空。悠々と空を翔るレッドドラゴンの力強さを肌で感じながら、真紅は改めてドラゴンという生物の強さを理解する。

「お前って本当に凄いな、ドラゴン」

「ロードだ」

「はい？」

背から飛び降りた真紅にレッドドラゴンは言葉を投げかける。

「ブレイヴ・ローズハート。それが我の名だ。親しみを込めて『ロード』と呼ぶがいい」

そう言って、ブレイヴ・ローズハート改めロードはドラゴン流の笑
いを見せるのだった。

お前の名前は何だ？（後書き）

名前、ブレイヴ・ローズハート勇敢なる薔薇の心。略してロード。

センスがない？ 俺もそう思う。でも、何でかブレイヴって言葉を
使いたかったんだ……。

次回、真紅とロード、暫しの別れ。さて、ここからどうやってデ
レデレに持っていくか……。

ロードファンタジー(前書き)

さあ、赤面する擬人化レッドドラゴンに悶えるがいい！！

ロード奮闘記

騎士養成学校生徒、黒神真紅と誇り高きレッドドラゴン、ブレイヴ・ローズハート改めロードとの間に交友関係が築かれて数週間が経過していた。剣の修行に付き合ってもらったり、一緒に星を見たり、共に空を翔けたりと、良好な関係を保っている。そんな折、真紅は山の麓にある村の小さな図書館に来ていた。調べる事はドラゴンについて。

「え〜っと、ドラゴンドラゴン……あった」

と言うのも、最近の真紅に対するロードの態度が変なのだ。疎ましく、鬱陶しく思ってる訳ではないのは確かだ。どういう心境の変化か、ドラゴンの姿ではなく人間の姿でいることが多くなった。それだけではなく、四六時中真紅と一緒にいたがったり、甘えるような濡れた瞳を向けながらしな垂れかかっていたり……とまあ、こんな具合に、真紅はロードの対応に困っていた。そこで、ドラゴンについて少しでも調べようと来た訳だ。辛苦は早速見つけた本を机の上に広げ、読み始める。

「ドラゴン。その者達については依然として分かっていない事が多い。誇り高いその者達は我等人間を見下し、拘わる事を良しとしなからだ。ドラゴンについて分かっている事は少ない。一つ、人間より遥かに知能が高い。二つ、古の時代に存在した古代文字を読解する。三つ、自分が認めた相手に対してはとことんまで友好的。特に雌のドラゴンは番の存在となる雄に対して恐ろしいほどに依存し、全身全霊をかけて尽くす……番の雄に全身全霊で尽くす？」

少し思い出してみる、自分を見るロードの目を。

「……いや、まさかな」

ロードが、あの誇り高きレッドドラゴンであるロードが、人間如きである自分を番う存在として見るはずがない、と真紅は己に言い聞かせた。それに、と遠い目をしながら呟く。

「そろそろ、夏休みも終わる頃だから……」

帰還の時は迫っていた。ロードとの別れは近い。

「……つまらないな」

巨岩に背を預けながら青空を見上げていた人間姿のロードは上の空でそんなことを呟いた。彼女の横に真紅の姿は無い。

「……真紅」

美しい』という言葉をかけてくれた彼に。短き時で自分を魅了し、焦がれるほどに恋させた彼に。

「真紅」

空に手を伸ばす。例え誰であろうと、加速し続けるこの想いは止められない。ならば、

「逢いに行こう」

立ち上がり、ロードは決意を胸に拳を握り締める。その瞳にもう涙は無かった。

と、意気込んでみたものの、自分のような存在がいきなり押しかけ
ては真紅に迷惑が掛かるだろう。幾ら今まで人間に興味がなかった
とはいえ、それくらいのこと理解していた。別に他の『小さき者』
にどんな迷惑がかかろうが知った事じゃない。だが、自分のせいで

真紅に迷惑がかかるのだけは嫌だった。そう言う訳で人間について色々調べるため、ロードは今、山の麓にある村へと降りてきていた。勿論、人間の姿でだ。

「思えば、真紅以外の『小さき者』と話すのは初めてだな。もとより、話す心算も無かったのだが……どうでもいいが、何故道行く『小さき者』達は私のことばかり見ておるのだ？」

自分に見惚れている人間たちを内心鬱陶しく思いながらも、ロードは偶々目に付いた酒屋へと入っていった。扉を開いて中に入ると、紫煙がロードの目と鼻を刺激する。軽く顔を顰めながら店内を見回す。酒屋と言う小さなものとはいえ、人間が作った建物に入ったのは初めてのことなので、ロードは物珍しそうに店内を眺め回っていた。すると、店主と思しき老年の男が物腰低く訊ねてくる。

「あの、もしお嬢様。ウチに何の御用でしょうか？」

「お嬢様？ 我が？」

コクリと頷く店主。そう言えば、とロードは今の自分の姿を思い出した。こんな小さな酒屋とは無縁の豪華な紅のドレス。少しばかり、いや、もの凄く場違いだ。長居は無用、とロードは早速本題に入る。

「騎士養成学校について話を聞きたい……弟が行ってるものでな」

かなり無茶なことを言ったが、この酒屋の店主はかなりのお人好しらしく、何の疑いもせずにロードに話を聞かせてくれた。曰く、

国が設立した唯一の騎士を養成する学校、国最大規模の学校で、生徒の数は数千に及ぶ。優秀な成績を納めて卒業すれば、王族に仕え

る事も夢ではない。一カ月後に生徒と魔獣による『契約の儀』が執り行われるとのこと。

「おい、その『契約の儀』というのは何だ？」

「いや、騎士養成学校に通っているということは即ち、将来王族に仕えると言う事でしょう。だから、王から成績優秀者に、国が育てた魔獣と『血の契約』を結んで、乗騎として貰い受けるというものでして……って聞いてますか、お嬢様？」

店主の言葉は既に彼女の耳に届いていない。これだ、とロードは確信していた。その『契約の儀』とやらで、自分が真紅の乗騎になればいいのだ。そうすれば、何時でも真紅と一緒にいる事が出来る。逸る気持ちを抑え、ロードは礼を言いながら席を立つ。

「礼を言うぞ。聞きたい事は聞いた。何か礼になりそうなものは……」

「あ、いや、いいんですよ別に。私は誰でも知ってる常識を話しただけ」

「その誰もが知る常識と言うのを、我は知りたかったのだ」

礼代わりに机の上に置かれた、大人の拳以上の大きさを持つルビーに目を丸くしている店主に軽く頭を下げ、ロードは酒屋から飛び出した。

「我が最愛の者よ。今、逢いに行くぞ」

すぐにでも竜の姿に戻って飛び立とうとするが、ふとロードはある

ことに思い当たる。そう、彼女は人間の作法も常識も知らない。

「あの『小さき者』、契約の儀とやらまで一ヶ月の時があると言っておったな……よし、その間に人間界の常識と作法を学ぶとしようぞ。土産の一つも持ってつたほうが良かるうな、うん」

ふと、ロードは過去に聞いた『小さき者』の言葉を思い出す。

『恋に生きようとする女はどこまでも強くなれる』

この言葉をバカにしていた自分を恥に思うロードだった。

翌日、ロードは牙に皮袋の紐を括りつけて、ある場所に向かって飛んでいた。袋の中身は彼女の牙、角、皮、血。そしてオリハルコン、ヒビイロカネ。何れも、一つ売れば小さな国なら買えるほどの価値を持っている。当たり前だが、彼女にこれらを売る心算はない。全て、真紅への土産を作るために用意した材料だ。

(まさか、たった一日で集められるとはな……自分の身体から剥ぎ取ったものともかくとして)

改めて、自分がどれだけ真紅にイカれているかを思い知るロードだった。そんなことを考えてる内に目的地が見えてきた。目指すは鍛冶を生涯の生業としている、鋼鉄の全てを知るドワーフ族の地上にある唯一つの鍛冶場。天空の覇者たるロードにとって、地の底に住まうドワーフは無縁の存在。故に千年以上の時を生きてきた彼女でも、ドワーフと顔を合わせるのは初めてのことだった。

(柄にも無く緊張してきたのう……しかし、ドワーフなら最高の物を鍛えてくれるだろう)

生まれて初めて味わう、緊張という感覚に戸惑いながらも人間の姿になったロードは鍛冶場へと足を踏み入れた。大量の湯気と尋常ならざる熱気。常人なら耐えられないような熱気がロードを出迎える。だが、炎を体内に宿し、焰を友としてきた彼女にとって、熱気など存在せぬようなものだった。ロードが誰かいないかと見回していると、湯気の向こうから何かが現れた。一般人の二分の一程度にも満たない身長、だが樹齢数百年の樹木のようにがっしりした体躯、もじゃもじゃの髭、顔のど真ん中に居座る団子鼻。

「ドワーフ……で良いのだな？」

「それ以外に何かあるってんだい？　と言うか、お宅こそ何者だねお嬢ちゃん。この熱気の中で表情一つ変えないなんて普通じゃないぜ」

そりゃそうだ、自分はレッドドラゴンなのだから。口に出かけた言

葉を呑みこみ、肩に引つ掛けていた皮袋を差し出す。

「何も聞かずに、この袋の中の材料で長剣を作って欲しい」

怪訝な表情を浮かべながらもドワーフは皮袋を受け取り、中身を覗き込んだ。数秒後、顔を上げたドワーフの表情は驚愕一色に染まっていた。

「お嬢ちゃん。どうやってこんだけの材料を？」

「何も聞かずに、と言った」

答える気は無い、と言外に伝えながらロードは承諾の返事を待つ。ドワーフは静かに皮袋を傍らに置き、再び視線をロードに注ぐ。

「これだけは答えてくれ。わしらが作った武器をお嬢ちゃんはどうする心算だ？」

返答に詰まるロード。何分、理由が理由だけに言うのは顔から火が出るほど恥ずかしい。黙り込むロードにドワーフはため息混じりに話し出す。

「昔にな、お嬢ちゃんほどじゃないが、すんばらしい材料を抱えた男が一人この鍛冶場にやって来た。剣を作ってくれてんで、わしらは誇りをかけて最高の剣を作った。その剣はどうなったと思う？王への贈り物にされた。きっと、今だに剣として使われた事はないだろう……わしらは贈り物を鍛えとるんじゃない、武器を、護る為の『武器』たましいを鍛えとるんだー！」

割れ鐘の如き声でドワーフは鍛冶場を震わせる。肩で息をしながら

呼吸を整え、ドワーフはロードを見据えた。

「正直に答えてくれ。お前はわしらが作った武器をどうするつもりなんだ？」

「……………わ、笑わないか？」

頷くドワーフ。鍛冶場内の熱気に汗一つかかなかった顔を真っ赤に染め、人差し指をくるくる回しながらロードは蚊の鳴くような声で囁く。

「さ、最愛の人への贈り物に。そ、そそそ、それで」

「それで？」

「我を護って欲しいなあ、なんて……………」

ポカン、と呆けたように口を開くドワーフ。が、それも一瞬の事で、すぐに爆笑し始めた。

「わ、笑いおつたなあああ！！！！！！」

怒りの余り、竜に戻りそうになる。そんなことは露知らず、ドワーフは腹を抱えて笑い続けた。

「がははははは！！！！ これだけの材料を集めるんだからどんな女傑かと思えば、中身は手遅れの恋乙女だ！ がはははは！！！！！！ 後、一つだけ質問に答えてくれ。その最愛の人とやらは、出来上がった剣を持つに相応しい奴なのか？」

「無論だ」

ドワーフにとって、その一言だけで十分だった。一つ頷くと皮袋を肩に担ぎ、闘志すら窺わせる表情を浮かべる。

「良いだろう。この依頼、受けてやる。期限は？」

「一ヶ月以内だ」

「これだけの材料を一ヶ月で武器に仕立て上げる？ 無茶言いやがる……分かった、一ヶ月だ」

大声で仲間に声をかけるドワーフを肩越しに見ながらロードは鍛冶場を出る。今度は自分が人間の常識や作法を学ぶのだ。

「中々に濃い一ヶ月になりそうだな」

あつという間に一ヶ月の時間が流れた。粗方の知識と作法を頭の中に詰め込んだロードは、出来上がってるだろう長剣を受け取りに鍛冶場へと急いでいた。

（この一ヶ月、地獄だったな。思い出したくも無い）

背筋に悪寒が走る、これまた生まれて初めての感覚を味わってる内に鍛冶場にたどり着いた。中に入ると、一月前に応対してくれたドワーフが出迎えてくる。

「どうした、顔色が悪いし隈が濃いぞ？」

「どこぞのお嬢ちゃんが無茶苦茶な注文をしてくれたんでね。この一ヶ月、鍛冶場にいた連中は誰一人寝てないさ」

狂気すら感じさせる血走った目に睨まれ、ロードは乾いた笑いを浮かべながらも視線を逸らす。

「す、済まんかったな。それで、頼んだ物は出来たのか？」

「後は銘を刻むだけだ」

ロードの問いに答えながらドワーフは抱えていた、自分の身長以上ある棒状のものの包帯を取り始めた。やがて姿を現した長剣に、ロードは感心の声を上げる。

「流石はドワーフ。最高の仕事をしおるわ」

レッドドラゴンの材料を大量に錬りこまれたオリハルコンとヒビイロカネ混ぜて作られた刀身は燃え上がる炎のように輝きを放ち、柄

に埋め込まれたルビーは星の如く。

「そういう贅辞は仕事が終わってから受け取らせてもらう。それで、こいつの銘は？」

数秒ほど悩み、ロードは名を思いついた。

「レッドローズ
紅薔薇！！」

すると、紅の刀身に炎が奔り、紅薔薇を表す古代文字が刻まれた。その光景にドワーフは目を丸くする。

「凄えことが出来るんだなお嬢ちゃん……本当に何者だ？」

「気にするな。初恋に発破をかけられ、止まる事を捨てた大馬鹿者だ」

茶目つ気たつぷりに笑いながら鞘を受け取り、レッドローズを収める。頭上に広がる蒼空を仰ぎながら、ロードは静かに想いを馳せた。

(最愛の人よ、すぐに逢いに行くぞ)

ロープ下掘り日記(後書)

次回、再会するのよ

恩師、戦友との再会（前書き）

ええ、久しぶりにこっちを投稿。読んでくれると嬉しいです。口
ードと真紅の再開は次回ですすみません。

それと紅様あ！ 長らくお待たせしてしまいましたあ！！！！

もう待ってないか。

恩師、戦友との再会

「戻ってきたな」

目の前に聳え立つ城門を見上げながら、真紅はどこか感慨深そうに呟く。ドラグニア王立騎士養成学校。それがここの正式名称だ。過去、ドラグニアが隣接する国々を併合するに辺り、王達はドラグニアの力を恐れ次々と降伏していったが、この城の持ち主である国王、そして国王に仕える騎士達は最期までドラグニアに抗った。結局、民の安全を条件に国王は降伏したが、当時のドラグニア王は国王に敬意を表し、国王に別の城を与えて、この城を次代を担う騎士を育てるための学校にした。それがドラグニア王立騎士養成学校である。

左肩にかけてバックを揺すり上げ、真紅は城門を潜って中庭へと歩いていった。一足早く夏休みから戻ってきた生徒がちらほらと見える。ふと、一人が真紅の存在に気付き、近くににいる者に報せた。数分とせずに集まる視線の数々。どれも、蔑みや侮蔑を含んだもの。友好的なものは一つとしてない。そういう視線を受けるのはもう慣れてしまっていたので、真紅は特に何か反応を見せるでもなく足を動かしていた。

「黒神ではないか」

元兵舎を改築して作られた男子寮にもう少しでつく所で後ろから声をかけられ、真紅は歩みを止めて振り返った。

「デイズ先生、お久しぶりです」

真紅がペコリと頭を下げる先には一人の女エルフが立っていた。名

をディザスト・ストームブリンガー。自分にも他人にも厳しい、五百年以上の時を生きてきた女傑である。元々は国境を警備するエルフ族の長だったが、何代か前の王が頼んでここの教官として働いてもらう事になったのだ。総合戦闘術の教官で、とにかく厳しい事で有名。生半可な心構えで授業に臨めば、一瞬の内に叩き伏せられる。その為、口の悪い連中からは鬼教官などと呼ばれているが、真面目に取り組む者に対しては驚くほど熱心に指導してくれるので、多くの生徒に慕われている。ちなみに愛称はディズである。

「山に籠って修行をしていたと聞いたが、怪我はなさそうだな。何よりだ」

厳しいとは言ってもそれは指導に関してなので、それ以外については結構寛容な方だったりする。今まで指導してきた貴族のボンボンと違い、常に真面目に授業に取り組んでいる真紅を彼女はことのほか気に入っていた。微笑を浮かべながら歩み寄ってくるディズだったが、真紅から後数歩と言うところで立ち止まると表情を引き締め、型の良い鼻を小さく動かしながら真紅の匂いを嗅ぎ始めた。

「え、あの、何か臭いますか俺？」

「いや、安心しろ。少なくとも他者を不快にする臭いは放っていない……ただ、お前からとても濃密な炎の匂いがする。黒神、夏休みの間に、何か爆炎を纏う何かに遭遇しなかったか？」

ディズの問いに真紅はすぐに彼女の事を思い出した。ロードだ。あはは、と乾いた笑みを浮かべながら真紅は頭を掻く。

「あはは……ちょっと、修行で籠った山の中でレッドドラゴンと出会っちゃいました」

「レッドドラゴンだと！？ ……っ！？」

慌てて自分の口を塞ぎながらディズは真紅に顔を寄せ、可能な限り声を小さくして訊ねた。

「それは本当か？」

「教官に嘘ついて俺に何の得があるって言うんですか？」

そいつもそうだ。納得したように頷くとディズは真紅から顔を離し、まじまじと彼に遠慮の無い視線を注いだ。

「それにしても、レッドドラゴンと相対してよく無事でいられたな」

意外と良い奴でしたよ、と口から出そうになったが、真紅は何も言わなかった。レッドドラゴンと出会っただけでも奇跡だと言うのに、友人になった、背に乗せて共に空を飛んだ、あまつさえ名前まで教えてもらったなんてことは御伽噺でもない。それ程にまでドラゴンとは、この世界に存在する種族の中で超絶した立場にいるのだ。

「それよりも教官、質問をしてもよろしいでしょうか？」

「許可しよう」

「何故ここに？ 今年の夏休みは故郷の森に戻ると聞いていたことが？」

そのことが、とディズは少しだけ苦い表情を作る。

「一ヶ月後に成績優秀者と国が育てた魔獣による『契約の儀』があることは知っているな？」

当たり前だ。真紅自身もその成績優秀者の中に数えられているのだから。それがどうしたんですか？ と問う真紅にデイズは肩を竦めて見せた。

「国が育てた魔獣。その中にとんでもないものがいてな。いや、正確には混ざったと言うべきか……」

「とんでもないもの？」

「名くらいは知っているだろう？ ラグナウルフだ」

デイズの口から出てきた名に真紅は目を丸くする。彼女が口にしたものの名はそれ程の意味を有しているのだ。ラグナウルフとは闘狼バトルウルフと呼ばれる強力な種族の中でも特に強い力を持つ、数千年に一頭だけ産まれるという伝説の存在だ。体毛の色は黄金、瞳の色は紺碧。魔力を有し、人語を解することさえ可能。戦闘力は世界の中でも随一、地上戦であればドラゴンをも凌駕する。ドラゴンが天空の覇者と呼ばれるのと同様に、ラグナウルフは大地の守護者の二つ名を持っている。

「そんな凄いのをまだ正式な騎士にもなっていない俺達に乗騎として与えるなんて……王族の考えることは分かりませぬね」

「いや、そうではない。ラグナウルフは自らの足でここに来たらしいのだ。もしかすると、己の主に成りうる者が現れたと、本能で察したのかもしれないな」

そんなことがあるのか？ と真紅は心の中で思ったが、ロードのよ
うな生物がこの世には存在しているのだ。今更、どれ程の力を有し
た魔獣が出てきたところで、大きな驚きは感じないだろう。

「そうですか……とりあえず、教官が戻ってきた理由も大体理解し
ました」

万が一、ラグナウルフのような強大な力を持つ魔獣が暴れたら、こ
こは一瞬にして廃墟と化すだろう。そうならないようにするため、
『ストームリフ嵐を支配者』の二つ名を持つデイズが故郷の森から呼び戻され
たのだろう。

「まあ、ラグナウルフが伝え聞いた話通りの魔獣なら、万一にもそ
んなことは起こらないと思うが。引き止めて済まなかったな。長旅
で疲れただろう。しっかりと休んでおくといい」

歩き去っていくデイズの後ろ姿に頭を下げ、真紅は自分の部屋に荷
物を置きに寮の中に入っていった。

「おっ、真紅じゃねえか！」

夕食を食べるに食堂へ向かっていると、不意に声をかけられた。振り返ると、一房のアホ毛が目映る。

「ソウヤか。久しぶり」

真紅は片手を持ち上げ、友人のソウヤ「テイスタニア」に手を振る。ソウヤも手を振りながら真紅の横に並び、二人はそのまま食堂へと向かった。

「んで、お前は夏休みの間何してたんだよ？」

「山に籠ってひたすら修行してた。お前は？」

「似たようなもんだな。親戚の家に行って、近くの町で行われてた闘技大会で戦いまくってた」

ソウヤ「テイスタニア」。名門貴族テイスタニア家の次男坊なのだが、ソウヤの平民を差別しない鷹揚とした性格のため、実家とはあまり仲が良くないようだ。実家だけでなく周囲、主に騎士養成学校にいる貴族の生徒達から良くない目で見られているが、本人に気にする様子は一切なく真紅と普通に接していた。

「どうだ？ 明日辺り、お互いの修行の成果を験してみねえか？」

「それは別に構わないけど……ソウヤ」

真紅は廊下の曲がり角を顎で示す。ん？ と疑問符を浮かべながらソウヤが振り返ると、そこには。

「ジ〜……」

一人の金髪をサイドテールにした少女が二人を、正確にはソウヤのことを見ていた。

「あれ、アインハルトだろ。お前に用みたいだぞ」

「何だつてあんな真似を……おい、何してんだアイン？」

ソウヤが大声で声をかけると少女、アインハルト・ソル・グラン・リ・イングヴァルトはビクツと身体を竦ませた。彼女、アインハルトはソウヤの幼馴染だ。ソウヤ同様、平民に差別意識は無い。寧ろそういう意識を持っている貴族を毛嫌いしていて、過激な発言をする事も。が、素の彼女は。

「ひ、久しぶりソウヤ。それに真紅さんも」

好きな相手に声をかけられただけでギクシャクしてしまう純情乙女だ。

「久しぶり。それで、ソウヤに何か用か？」

「その、これから食堂に行くみたいだから、私も一緒に行ってもいいかなって」

「何だ、そんなことかよ。なら早く行こうぜ」

言うや、ソウヤはアインハルトの手を握る。顔を爆発するアインハルト。さっさと歩いていくソウヤと、ブリキ人形か何かのように動きを更にギクシャクさせ始めたアインハルトを真紅は何とも言えない表情で見ている。

「奔れ疾風、翔けよ迅雷！ 『雷の嵐』！！」

「洒落臭え！！」

ソウヤが放った雷を纏った突風を、真紅は炎を纏わせた長剣で切り裂いた。雷の嵐に隠すようにソウヤは水の槍を撃ち出していたが、真紅は神速の速さで長剣を返してそれを蒸発させる。

「細身とはいえ、重量のある長剣を小枝みたいに振り回すなんてどんな化物だよ手前は！！」

「はっ！
アイト 中級魔法に詠唱なしの下級魔法を紛れさせる上に近距離インフ

戦闘までこなすお前に言われたかねえよ!!」

中距離からの魔法は全て切られると悟ったソウヤは剣を振るうのも困難な超至近距離から大魔法を喰らわせようとするが、真紅の斬撃が懐に飛び込むことを許さない。それに、幾らソウヤが近距離戦闘もこなせるとはいえ、今まで愚直に剣を振り続けてきた真紅が相手ではいずれ押し切られる。

「ならよお!!」

真紅の一撃を弾くと、ソウヤは大きく後ろに跳んだ。

「こいつで決めてやらあ!!」

「来いやああ!!」

ソウヤは右腕に自分の出し切れる全ての魔力を集中させる。氷が腕を槍状に覆い、その上を雷と風が渦巻く。対し、真紅は頭上で長剣を振り回して周囲の大気を巻き込みながら長剣に纏わせた炎を巨大化させていった。

「巨神殺しの……」

「焼き滅ぼす……」

向かい合っていた両者が突っ込む。

「鉄槌!!!!!!」

「炎剣!!!!!!」

莫大な破壊力を内包した技がぶつかり合い、周囲に甚大な被害を齎そうとしたその時、

「来たれ暴風」

突如、暴風が吹き荒れた。その勢いたるや、全力の一撃を決めようとしていた二人を吹き飛ばすほど。空中に巻き上げられてる間に二人の魔法は消えてしまい、ほぼ同時に風がピタリと止んだ。

「どわあ！！」

「っでえ！！」

碌に受身も取れず、二人は仲良く地面に叩きつけられた。余りの痛みと衝撃に声も無く呻いている二人を見下ろす人影、もといエルフ影。

「盛り上がるのも大変結構だがな、黒神、テイスタニア……お前らは中庭を焦土に変えるつもりか？」

ため息を吐きながらデイズは周囲を見渡す。現在、生徒同士の模擬戦が中庭で行われていた。生徒のほとんどが周囲に影響を及ぼすほどの戦闘はしていなかったが、二人は別格で中庭の地形を変形させていた。中庭の惨状に胃を痛めながらデイズは額に手をやる。

「（前もって他の生徒達を避難させておいて正解だったな）……貴様らは少し周囲への配慮を考える。しかし、それさえ除けば、二人とも素晴らしい成長だった。今後とも精進するように！」

「はい!!」

起き上がった二人は背筋を伸ばして返事をした。二人の返事に満足そうに頷きながらデイズは今後の事を考えた。

(今回の『契約の儀』。この二人はどんな魔獣と契約するのか)

この時、彼女は予想もしていなかった。まさか『契約の儀』において、この二人が国家戦力にも匹敵し得る強さを得る事になるとは。

一方、アインハルトは

「五十人抜き、達成！」

「おお」

模擬戦で五十人抜きという偉業を成し遂げていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4555x/>

ドラゴンブライド

2012年1月4日03時46分発行